ゾーンのチベット仏教が見せる文化的資源性を、特定の僧院を事例としてさらに詳細に検討していくことで、現代チベット仏教が持つグローバルな動態の一端を明らかにできると考える。

シエンラブ伝に於ける孔子の位置

津曲 真一

チベットの宗教文献には屢々、古代中国の思想家・孔子に比定されるコンツェと呼ばれる人物が登場する。古代チベットに於いて孔子は、孔夫子の音写と思われるクン・プー・ツイ (*khung phu'u tsi*)、あるいはクンツェ (*khung tse*) の名で知られていたが、これが次第に転訛し、彼は後世の文献中でコンツェ (*kong tse*) という名で呼ばれるようになる。本来、チベット文化とは異なる文化に属するコンツェは今日、チベット文化域において広く行われるト (*gto*) と呼ばれる避禍招福の儀礼や、ナクツイ (*nag rtis*) と呼ばれる占星術に関する文献の中に登場する。また彼の名は、チベット語で「幻術の王」を意味するトゥルギ・ギェルポ (*'phuri gyi rgyal po*) という呼称を伴うことが多い。

コンツェに関する表象は仏教徒とボン教徒の間では大きく異なっている。トゥカン・ロサン・チュエキ・ニマ (一七三七―一八〇二)、ダライラマ五世 (*ngag dbang blo bzang rgya mtsho* 一六一七―一六八二) 等の手に成る仏教伝統に属する諸文献に依れば、コンツェは中国の五台山において文殊菩薩から占星術の技術を授与された存在であるか、或いは建築の技術に秀でた人物であったと伝えられる。一方、ボン教伝統では、

コンツェは占いの儀式執行中に瞑想の中で呼び起され、儀礼執行者に吉兆を伝える超自然的な存在とみなされており、また同宗教伝統の聖者であるシエンラブ・ミウ (*gshen rab mi bo*) の伝記によれば、コンツェは熱心なボン教信者であったと伝えられている。同伝記に依れば、コンツェはガプツェ (*gab tse*) と呼ばれる占星術のための計算図表を掌に持つて誕生し、成人して湖上にボン教寺院を建設した後、シエンラブに帰依し、自身の娘をシエンラブに与えて親族関係を結んだとされている。この他、同伝記には敦煌文書に含まれる所謂『孔子項囊相問書』に見られる孔子とその師と伝説される少年の対話と類似した物語が挿入されており、チベット文化における孔子の受容のあり方を見るうえで極めて興味深いものとなっている。

本発表ではコンツェとシエンラブの事績を描いた宗教画を参照しながらシエンラブ・ミウ伝に於けるコンツェの描写を概観し、ボン教と異文化の接触のあり方について検討した。

ナオジヨテから見たパールシー・コミュニティ

香月 法子

ナオジヨテとは、先祖代々ゾロアスター教を信奉するパールシーにとつて、パールシーであれば遅くとも十五才までには受けなければならない、伝統的なゾロアスター教への入信儀礼とされている。全てのパールシーが受けることが当然であり、寺院内の浄化儀礼などよりもパールシー一般にとつては、もっとも馴染みのあるゾロアスター教儀礼である。

しかしゾロアスター教の儀礼として、その成立過程を追って

みると、必ずしもその他の儀礼、鳥葬儀礼や浄化儀礼と比べて、それほど古い儀礼とは言えない。なぜなら「ナオジョテ」という言葉自体、十五世紀頃から、本来、聖職者になるための儀礼を指していた言葉が、一般教徒のクステイ授与に使われるようになったとされているからである。聖典『アヴェスター』やパフラヴィー文献、そして『リヴァーヤット』には入信儀礼を示す言葉も、入信儀礼を記述する箇所もない。これらで記述されているのは、聖なる紐であるクステイを結んでいるか否かということである。つまり本来、クステイそのものを授与されたことよりも、そのクステイをしているか否かが重要視されていたわけである。しかし後世の歴史においてパールシーは、一般教徒にクステイ授与の重要性を示すために、ナオジョテという新しい儀礼を創ったのである。

次にパールシーにとつてナオジョテを受けるということは、その後に、充実したパールシー・コミュニティ内の慈善事業を受ける資格を得るといふ、重要な社会的意義も持っているのである。パールシー・コミュニティにおける慈善事業は、本来、パールシーがパールシーのために用意したものであることから、現在まで、それを利用できる資格を持つものはパールシーのみとされている。そしてパールシーの理解ではナオジョテとはゾロアスター教徒になる儀礼であり、そして建前上、ナオジョテを受けないパールシーはいないことから、パールシー＝ゾロアスター教徒ということになる。つまりコミュニティ内の様々な慈善事業を受けられる者は、パールシーでありゾロアスター教徒であるといったことが、当然となっている。それ故、

ナオジョテを受けないといったことは、彼らにとって考えられないことなのである。

さらに、ナオジョテには儀礼後にパーティをとまなうことが一般的なスタイルで、この内容は年々豪華になる傾向にある。これらのパーティを請け負うのが、パールシーが経営するパーティ業者で、多くの受注が一業者に集中する。またナオジョテの儀礼を行う聖職者にも、ご祝儀が出る。特に収入が寺院からの給与だけの聖職者や、高齢な聖職者にとつてナオジョテで得る収入は重要である。しかしパールシーの人口減少や外婚の増加、晩婚化が、パーティ業者や聖職者のパイを、ますます小さくしていくことが容易に予測できる。聖職者は当然のことながらパーティ業者も、今後、どのように活路を見出していかうかが、パールシー・コミュニティが抱える問題の一つとなっていくと考えられる。

ドイツのヒンドゥー教

——シュトゥットガルト等での寺院調査から——

山下 博司

南アジア系ディアスポラにおけるヒンドゥー教の事情を精査するため、ドイツ連邦共和国シュトゥットガルト市とフランクフルト市に赴いてヒンドゥー寺院(計五箇所)を訪れ、寺院の様子を観察するとともに、管理者、司祭、信者等にインタビュー調査を行った。

ドイツのヒンドゥー教についての情報は極めて乏しい。インターネットなどのソースを便宜的に参照すれば、「ヒンドゥー